

Presented by Ken Takemi
竹内けん

2DB
2010年10月25日

ちえりーな
Illustration by Terina



試し読み版

ハーレムアベンジャー

HAREM AVENGER

痴女と監獄とエッチな責め苦

ハーレムシリーズの世界





● グリンカムピ
ナウシアカ

● フェンリル

ターラキア山脈

● ベリージャム
サイアリーズ

シュルビー

フレシア

● カブス

● エバグリーン

エクスター

● ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

● ガラティア

● レヴィ

● ライオネル

クラナ

カーリング

● ヒューリアス

バロムリスト

ニーテンベルグ

フルセン

● アヴァロン

● ヒーナス

● サラマンカ

樹海

メリシャント

オルシ

● クインクエ

タルクイニア

● エレオノーラ

クレオンレーゼ

ペルセボネ

イシュタール

● ゼビュロア

シエルファニール

● シェンロン

西海航路

ダリシン

モンテルナモ

● マリア

ランチェロ

ローランス

● ラリマール

● マルタ

カルロッタ

登場人物紹介



セレスティナ

モンテルナモ王国の第三王女。
優しく貞淑で非常にできた女性。

ハイレディン

モンテルナモの俊英としてセレスティナの婚約者となった貴族。
公明正大を旨とする好青年。

ウイスパ

モンテルナモの青年貴族。武芸
学問を競い合ってきつハイレディ
ンの親友で、共に戦場へ赴く。

Characters
HAREM AVENGER

アルベルタ

仕事に対して真面目な女看守。
囚人に対しては身分に関係なく
徹底した態度であたるDS美女。



リズリット

モンテルナモ王室と強い
関係を持つ大貴族の娘。
気位が高く幼馴染のハイ
レディンに思うところがある。

第一章 幸せの絶頂

第二章 奈落へ

第三章 快樂責め

第四章 女看守アルベルタのご褒美

第五章 真犯人はだれか？

第六章 おーほほほっ、女王様とお呼び♪

009

056

091

129

164

210

金糸の入った股繰り部分にはすでに大きな沁みがあった。白い生地だけに透けてしまつて、内側の黒い陰毛を見せている。

「濡れているね」

「は、恥ずかしい……」

頬を染めたセレスティナは、顔を背ける。

清楚という言葉を絵にしたような少女でも、男に身を預けて興奮してしまっているのだらう。

「ショーツを脱がせるから、足を揃えてあげて」

「は、はい……こうでしょうか？」

男に命じられるがままにセレスティナは両足を揃えて、宙にあげた。そこでハイレディンはショーツの左右の腰紐に手をかけて、すーと引きずりあげる。

股間部分とショーツの股繰りの間で、ツーと透明な糸が引いた。

白いタイツに包まれた足を下ろしながらセレスティナは、慌てて左手で股間を押さえる。
「セレスティナ。手をどかして」

「あ、灯りを消してください……」

涙目のセレスティナの必死の訴えに、ハイレディンは頬を搔く。

「えーと、灯りをつけたままではダメかな？ 実を言うと、ぼくも、こういうこと……初

めてで……暗いとどこをどうしていいかわからないんだ」

「そうなんですか？ ハイレディンさまはすごくカッコイイですし、おモテになるから、たくさん遊んでいるのだとばかり……」

ハイレディンは有力貴族の嫡子である。そのうえ武芸に優れて、容姿も悪くない。その気になれば、いくらでも遊べたはずだ。

「サリー従姉さんが言っていたでしょ。ぼくは童貞だよ。自分の妻になる人以外とは、こういうことをする気はなかったからね。だから、上手くできないかもしれない。ごめんね」
「いえ、そんな謝らないでください。ハイレディンさまも初めてで嬉しいです。わたくしも愛する殿方、ハイレディンさま以外のお大事なんて、興味ありませんから」

セレスティナは目をキラキラさせている。

「それでは、灯りをつけたままにしてください。わたくしにはハイレディンさまに隠すものはありません」

セレスティナは恐る恐る震える手を、股間から離した。

真つ白な白絹のような肌に、艶やかな黒い陰毛が、ぱつと映える。

「ありがとう」

そう言ってから、ハイレディンはセレスティナの細く長い両足を持って、大胆にM字開脚させた。

薄い陰毛の下に、肉裂がある。その下には肛門。

どんなに清楚可憐なお姫様でも、生殖器もあれば、排泄もするということだ。当たり前のことだが、実際に目の当たりにすると、衝撃的である。

「や、やっぱり、恥ずかしいです。あまり……見ないでくださいね」

「見ないと、どうしていいかわからないよ。それに恥ずかしくないよ。すべてを俺にさらけ出して」

「は、はい……」

優しく促されたセレスティナは、顔を真っ赤にしながらも観念したようだ。目をぎゅつとつぶって、身を固くしている。

そこでハイレディンはそつと、下ろし立ての筆のような黒い陰毛を撫でてから、肉裂の左右に親指をあてた。そして、開く。

メラリ……

女の陰華が花開いた。ふわりとフローラルな薫りがする。おそらく先に風呂場で侍女たちが入念に洗ったのだろう。

左右の花弁の間に、透명한蜜の糸が引いている。

「ああ、そんな……広げるだなんて」

「セレスティナはオマ○コの中まで綺麗だね」

濡れそぼつ艶やかな華の中に、包皮に包まれた陰核があり、その下にぽっかりと開いた膣穴がある。その間に、目を凝らすと、ポツンと針の孔のような尿道口もあった。

好奇心を刺激されたハイレディンは、右手の人差し指を恐る恐る、膣穴にあてがい入れてみた。

「ひっ」

ビクン

セレスティナは悲鳴をあげて、体を激しく震えさせた。

「ごめん、痛かった？」

「はい……すごく……」

セレスティナは涙目で、恨めし気に睨んでくる。

どうやら、処女膜に触れてしまったらしい。反省したハイレディンは責める場所を変え
る。

愛液に濡れた指を、上にあつた肉皮に包まれた肉芽に向ける。そこを触れるか触れない
かの感覚で、優しく揉み解す。

「あ、ああ……」

今度のセレスティナの悲鳴は、明らかに甘やかだ。

「ここは気持ちいい？」

「はい。気持ちいいです」

男の指で急所を撫でられたセレスティナは、まるで猫のように嬉しそうに頷く。

少し悪戯心を刺激されたハイレディンは、愛液をたつぷりと掬った指をいったん陰部から離して、セレスティナの鼻先に翳して見せつける。

「すごい濡れっぷりだね」

「はう！」

絶句したセレスティナは、恐る恐る質問する。

「気持ちよくなると濡れるとは聞いていたのですが、あ、あの……わたくし、その、濡れすぎではありませんか？」

「たしかにね。まるでおしっこ漏らしたみたいだ」

ハイレディンの揶揄する声に、セレスティナは真剣に「反論する」。

「漏らしていません！ わたくしは好きな殿方の前で、そんな恥知らずなことはいたしませんから。でも、その……やはり濡れすぎですよ……」

不安を隠せないらしいセレスティナを、ハイレディンは優しく慰める。

「そんな心配しないでいいさ。濡れやすいというのは女性の魅力の一つだっていうよ。だから、こんなに濡れているってことは、セレスティナは素敵な女性だという証なんだ」
そう言いながら、今度はクリトリスを摘まんだ。

「はう!？」

「ここ、自分で触った経験は？」

女の急所を捉えられたセレスティナは、引きつった表情で首を横に振るう。

「ありません。そこは不浄な場所ですから……」

「そっか」

さすがは真正正銘、金縁付きの箱入りお嬢様。オナニー経験すらないらしい。生まれてから今日まで、十八年間、オナ禁していたことになる。

清楚な女性に恥ずかしい恰好をさせることに、男としての喜びを感じながら、ハイレディンは濡れそぼった花園へと口を近づけていった。

ペロリ

媚粘膜を下から上まで舐めあげた。塩分の利いた薄い酸味が舌に広がる。

「ふあん、そ、そんなところを、舐めるだなんて……ああ、ご不浄をする場所ですよ」

「大丈夫、セレスティナの体に汚いところなんてないよ」

嘯いたハイレディンは、さらに執拗に姫君の媚肉を隅々までペロペロと舐める。

ピチャピチャピチャ……

「ああ、こんなの恥ずかしくありません。ああ、ああ、ああ、ああ……」

羞恥に悶える心とは裏腹に、肉体的には気持ちいいのだろう。股を開いたセレスティナ

は背筋を弓反りにして、ビクビクと痙攣した。

思いつきり感じている証明というかのように、ハイレディンの鼻先では薄皮に包まれた小さな陰核が、ぷくつと突起している。

(これ、剥けるかな?)

男としての好奇心を刺激されたハイレディンは、両手の人差し指を陰核の左右に添えて、ぐいっと剥きあげた。

「ひい」

小さくて真っ赤な肉宝石があらわとなる。

どうやら、初剥きされた陰核は、空気に触れただけで痛いようだ。その点、男の包皮が初めて剥けたときと同じなのだろう。小さくすぼまってかわいそうなほどにヒクヒクと痙攣している。

愛する女の痛みを少しでも和らげてやりたいと欲したハイレディンは、その剥きだされ震えている小さな赤玉を口に含んだ。

「ああ、そ、そこはあああああ!!!」

ビクビクビクビク

悲鳴を張り上げたセレスティナは、もはやまともな口も利けなくなったようだ。目を大きく見開いて、全身を痙攣させている。

もつと感じさせたいと欲したハイレディンは、陰核にしゃぶりつきながら、さらに両腕を伸ばし、セレスティナの左右の乳房を掴んだ。

乳房を揉みしだき、先端を扱きあげる。

「ひい、ひい、ひい……」

いわゆるイキっぱなしの状態になったのだろう。

セレスティナは白目を剥き、半開きになった口角から涎を垂らしている。

清楚なお姫様がアへ顔になってしまったのだ。

(か、かわいい♪)

おそろく、いや、間違いなくセレスティナのいままでの人生で、一度として見せたことのない忘我の表情を、自分の前でだけさらさせたのだ。男冥利に尽きる。

やがて満足した。というよりも、我慢できなくなったハイレディンは、陰核から口を外し、上体を起こした。そして、急いでズボンと下着を下ろす。

ぶるんつと唸りをあげて、いきり立つ肉刀が外界に姿を現した。その強度、いまならば鉄剣さえもへし折りそうだ。

「そ、それがハイレディンさまのお大事ですか？」

「お大事？ ああ、おちんちんのことね」

セレスティナは両手で顔を覆いながら、指の狭間から逸物を凝視している。

男が女性器に興味を持つように、女も男性器に興味を持つものなのだろう。セレスティナの心理を察して、ハイレディンは促す。

「触ってみる？」

「よろしいのですか？」

「ああ、もうぼくはキミのものだからね。ぼくたちは夫婦になるんだ。だから、ぼくのものにはキミの物だ。おちんちんに触りたいのなら遠慮はいらないよ」

相手が触りやすいようにハイレディンは、その場に立ち上がり仁王立ちとなった。

それを受けて身を起こしたセレスティナは、恐る恐る手を伸ばす。

「お、大きい」

感嘆しながらも、ゆつくりと両手を近づけると、右手の人差し指の先で亀頭部をツンと押した。

揺れる逸物をしげしげと眺めたセレスティナは、それから逸物を両手で優しく包み込む。そして、顔を近づけると、そっと頬擦りをする。

「固い。そして、暖かいです。これがハイレディンさま。わたくしの旦那様のお大事なのですね。ハイレディンさまの象徴に相応しい、逞しさです」

うっとりとした夢見るように頬擦りしていたセレスティナは、不意にハイレディンの顔を見て、質問してきた。

「女はこれを舐めるのですよね」

「いや、別に無理はしなくていいよ」

セレスティナは逸物を握りしめたまま、真剣な顔で首を横に振るった。

「いえ、侍女から教わっております。受け身だけの女は、マグロといって男に飽きられてしまうと」

「ああ」

部屋の扉に、ハイレディンは横目を向ける。

扉が細く開いており、そこからセレスティナのお付きの侍女たちが必死になって、主人の奮闘を窺っている。おそらく彼女たちが事前にレクチャーしたのだろう。

「フェラチオは女としての最低限の嗜みとか。それすらもしないようでは、旦那様に飽きられてしまう、そして、側室を持たれて、そちらに入り浸ってしまうとか。……そんなのイヤです」

「そんなことはないけど、それじゃ、お願いするよ」

「はい。一生懸命にご奉仕します」

真剣な面持ちのセレスティナは、両手で肉幹を持って逸物の先端を寄り目となつて睨み、クンクンと鼻で匂いを嗅いだ。それからそつと口を開き、さながら高級なディナーでもいただくかのように、逸物を口腔に含んだ。

「う、ふっ、う、ふっ……」

先ほど接吻のとき息ができなくて苦しんだセレスティナだが、そのときの経験を生かして、鼻で息をしているようだ。

鼻息で男の陰毛が揺れる。

始めはぎこちなく逸物をすすっていたセレスティナだが、やがて要領がわかってきたのだろう。

頬をすぼめ、リズミカルに頭を前後させる。

ジュルリジュルリ……

箸より重いものを持たないような御令嬢が、涎を垂らし、白い顎を濡らしながら、美味しそうに逸物をすすっている。

おそらくテクニク的には未熟の極みなのだろうが、その光景だけでハイレディンはたまらなくなった。

「くっ」

一気に射精欲求が高まってきたハイレディンは、慌てて逸物に気合を入れて留めながらセレスティナの口から引き抜いた。

「っ？」

戸惑うセレスティナを、そのまま仰向けに押し倒す。

「ごめん、セレスティナ。もう我慢できない。キミの中に入れて」

「キャッ！」

ハイレディンはセレスティナの両足首を持ち、V字に広げて彼女の顔の左右に置く。そして、剥きだしとなった濡れそぼつ陰唇の中央に開く穴に、いきり立つ逸物を添える。

「い、痛い」

セレスティナは反射的に、背中だけでまるで尺取虫のように上に逃れた。

いわゆる処女のずり上がり、というやつだろう。

紳士的だった男が、いきなり獣欲を剥きだしにしたことに、セレスティナは怯える。

「ま、待ってください。こういうことはやはり、結婚してから」

「そんなに待てない！」

叫んだハイレディンは有無を言わずにぶち込んだ。

ブツン！

清楚なる姫君の最終防衛線は、猛々しい男の肉刀によって蹴散らされた。

ズブズブズブ……

押し込まれた肉棒は、狭い穴を押し広げながら道なりに進み、ついには最深部にまで達してしまった。

「やった。ほら、見てごらん。ぼくのおちんちんが、セレスティナのオマ○コの中にずつ

ぼりと入っているよ」

「あ、ああ……」

ハイレディンの両肩を抱いたセレスティナは、涙目となってイヤイヤと首を横に振るつた。

「すごい気持ちいいよ。さすがセレスティナだ。オマ○コもすごい。キュツキュツと締まってザラツザラだ。これは名器だ。間違ひなく名器だ。世界で一番の名器だ。ぼくは浮気なんてしないよ。このオマ○コだけで十分だ」

ハイレディンもまた初めての体験に、興奮で自分でもわけのわからないことを口走っている。

そして、最愛の女性が破瓜の最中であり、痛みにのたうっているのだということも忘れて、荒々しく腰を振ってしまう。

「ああ、ありがとうございます。嬉しいです。ああ、お、奥にあたつて、ズンズンと……」
男として、一生懸命にリードしてきたハイレディンであったが、所詮は童貞少年。メッキが剥げた。

我を忘れて、まるで暴走する悍馬かんばのようにガムシヤラに腰を使ってしまふ。そして、瞬く間に限界を迎えた。

「もう、ダメだっ！ セレスティナ。中に出すよっ！ ぐっ」



ことになりませんが、よろしいのですか？」

「ああ、拷問でもなんでもするがいい。俺は無実だ」

「立派な覚悟です」

アルベルタは、ハイレディンの両の手首に枷をつけると鎖で繋ぎ、壁に吊るした。その前に立ったアルベルタは、わざとらしく黒革のムチを弄ぶ。

(さあ、来るならこい)

と睨む囚人を前に、露出狂の女獄吏は不意に微笑した。

「私事で恐縮なのですが、あたしはしがない平民の出身でして、父親は税理士でした」

「立派なお父さんだな」

いきなり身の上話をされて、ハイレディンは戸惑いながらも頷く。

「ええ、娘から見ても尊敬できる方でした。あたしも後を継ぐことを求められたのですが、結局、趣味と実益を兼ねて、この職を希望したのです」

「趣味？」

戸惑うハイレディンに、ムチの柄に軽く接吻しながらアルベルタは、赤い口角を吊り上げる。

「そう。あたし、ドSなんです」

「えっ!？」



三百六十度。どの方向から見てもドS女だが、本人からはつきりと宣言されるとやはり衝撃的だ。

いきなりの性癖の告白に、どう返事をしていいかわからない。

目を白黒させているハイレディンに向かって、アルベルタは自分語りを続ける。

「世の中の男って、みんなM女が好きなんですよね。M女なんて、男の前で股開いているだけの怠け者の豚女ばかりなのに……。それに対してSの女は、いかに男を楽しませるかとか心を碎き、このような恥ずかしい衣装を着てまでサービスをするというのに、まったくモてない。不公平な話だと思いませんか？」

「そ、そんなことはないだろう。キミほどの美人が……」

ハイレディンはなんとも返答に困った。

このアルベルタという女は、相当な美人である。背が高く堂々たる体躯。華やかな顔立ち、大きな胸、括れた腹部、張った尻。長い脚。どこをとつても、女としての理想型といつていい。

街を歩いていれば、だれもが振り返るだろう。

しかし、この装いを見たら、普通の男は尻に帆をかけて逃げ出すに違いない。

「うふふ、そんなにあたしの容姿が気に入りましたか」

アルベルタは、わざとらしく両手で持ったムチを頭上にあげて、腋の下を晒した。セク

シーボーズをとる。

「まあ、そういうわけであたしは、この仕事を天職と心得ております。愚かな囚人たちにムチを振り下ろし、無様な悲鳴を聞くとき、まるで天上の調べを聴くがごとき、無上の喜びを感じるのです」

「は、はは……」

あまりにもぶっ飛んだ女の性癖に、ハイレディンは乾いた笑い声をあげることしかできない。

「とはいえ、ゴミは所詮ゴミ。くだらない男どもをいくら調教したとて、虚しくなるだけのことと気づいてしまったのです」

アルベルタは遠い目をして、悲しげに目元を潤ませる。

「もっと一流の男を調教し、屈服させたいと夢を見ておりました」

「……」

「しかるにハイレディン卿は、やんごとなき身分に生まれ、若く、才能に溢れ、見目麗しい。あのセレスティナ王女殿下に見込まれるほどの超一流のお方。あたしの理想通り、いや、理想以上の殿方にございます。それがあたしの前で、どのように無様な痴態を晒してくれるのか。想像しただけで、あたし、はあゝ、興奮を抑えきれません」

ムチの柄を両手に持ち、自らの股間に添えたアルベルタは、恍惚とした表情で反り返る。

絶世の美女が晒す痴態とはいえ、あまりといえればあまりの性癖についていけず、ハイレディンは呆然としてしまう。

それからアルベルタは頬を紅潮させながら、ムチをゆつくりと振りかぶった。

「では、始めさせていただきましょう。あたしを失望させないでくださいませね」

そして、黒く太いムチが振り下ろされた。

ピシイイイッ!

ハイレディンの左肩から胸板にかけて、激痛が走る。

「っ!？」

肺腑をえぐられるような痛みにも、ハイレディンはのたうち回った。

そのさまをアルベルタは、青い瞳に油でも差したかのようなギラギラとした眼差しで見下ろす。

「さすが王女殿下の婚約者には選ばれるお方、並の男とは胆力が違いますわね。情けない悲鳴をあげることもない。大変、やり甲斐のある仕事のようにです」

「くっ……」

さすがにムチで打たれるのは嬉しくない。いつそ反撃しなくなつたところに、新たな入室者があつた。

「あはは、無様ですわね」

それはピンク色の髪をサイドアップにして、毛先をドリルのように巻いた小柄な女。紫色の軍服を着、下半身は紺色のミニスカートに、黒いタイツ、黒いブーツを穿いている。

その姿を見て、女拷問吏はムチを引いて控えた。

「これはお嬢様。このようなむさ苦しい場所に足をお運びいただくともよろしいものを」

平民出身の女にとって、大公の娘というのは、やはり恐ろしいのだろう。

救援の登場に、ハイレディンは安堵の溜息をつく。

「リズリット、来てくれたのか？」

しかるに、リズリットはさながらゴミ虫を見るように、ハイレディンを見下ろす。

「あら、慣れ慣れしくしないでくださる。反逆者」

「違う。俺はそんなことをしてない！」

まさか幼馴染にまで疑われているとは思わず、ハイレディンは血相を変えて叫ぶ。

「ふん」

鼻で笑ったリズリットは、腕組みをしながらハイレディンを見る。

「あなたが本気で謀叛をする気だったかどうかは知らないけど、あたしに泣いて土下座をして、慈悲を請うならば、助けてあげてもよろしいですよ」

「……」

鎖に繋がられた男と、反り返った小柄な女の視線がしばし正対した。

リズリットの主張の意味を、ハイレディンは脳裏で考える。

つまり、無実の証明ではなくて、罪そのものをなかつたことにする、と言っているわけだ。

「その場合、セレスティナはどうなる？」

「あなたとセレスティナが婚約しているからこそ、謀叛なんて噂が立つのよ。当然、解消ね」

ハイレディンは有力貴族の嫡子であったが、謀叛を起こすほどの力はない。セレスティナの婚約者という肩書がなければ、だれも信じない噂である。

たしかにリズリットの主張は、正しい。

「そんなことをしなくとも、俺は無実だ」

「ふん」

傲慢に鼻を鳴らしたりリズリットは、傍らの拷問吏に命じた。

「あなた、遠慮はいらないわ。徹底的にやりなさい」

「はい。お嬢様」

こうして、アルベルタに席を譲ったリズリットは、部屋に備えられていた椅子に腰を下ろすと、左手を翳し、右手で鑿やすりを取り出すと、爪の手入れを始めた。

つくと、悠然と立ち上がった。

「少し代わりなさい」

「はい。お嬢様」

内腿を油でも塗ったかのように光らせた女官吏は、素直にムチを引く。

「はあ、はあ、はあ……」

荒い呼吸を繰り返すポロボロの男に、リズリットは蔑みの眼差しを送る。

「どお、そろそろ己の立場がわかったかしら？ あたくしに命乞いをしてはどお」

「俺は無実だ」

「ふう」

やれやれといった表情で肩を竦めたりズリットは、不意にハイレディンを吊るす鎖を緩めた。

ドスン

ハイレディンは床に腰を下ろす。

（口ではなんだかんだ言っているながらも、助けてくれるのか？）

そんな淡い期待をハイレディンが抱いたのも束の間。むっちりとした右足をあげたりズリットは、囚人の顔の横の壁にかけた。

見上げたハイレディンの視界からは、ミニスカートの中が覗けてしまう。

黒いタイツは太腿の半ばからガーターベルトで吊るされている。その上からお洒落な透かしの入ったショーツが穿かれていた。

「な、なにを……!?!」

戸惑うハイレディンを蔑みの眼差しで見下ろしつつ、ショーツを晒した少女は昏く笑う。「あなたに身の程を教えてあげる。あなたの殺生与奪の権利はあたくしに握られているのよ」

憎々しい表情のまま、リズリットは左手をスカートの中に入れるとショーツの股繰り部分をぐいと横に避けた。

当然、ぷつくりと膨らんだ恥丘と、そこに萌える淡いピンク色の陰毛、そして、女の亀裂があらわとなる。

「なにを考えているんだおまえっ!?!」

動転したハイレディンは慌てて、視線を逸らす。

「別に見てもいいわよ。いまのあんたなんて犬猫以下だし。人間様は犬畜生に裸を見られても恥ずかしくないのよ」

嘯いたリズリットは、さらに左手の人差し指と中指で、亀裂をぐいと割ってみせた。

「……」

顔を背けていたハイレディンであったが、思わず横目で見てしまった。



悪い表情とは裏腹な、小ぶりで鮮紅色の美しい姫貝である。

「うふふ♪」

ハイレディンが見た、ということを探して昏く笑ったりズリットは、ついで下腹部を脈打たせる。

「はあ……」

顎をあげたりズリットは氣の抜けた声をあげると共に、下腹部から温かい飛沫をまき散らした。

プシャー！

女の場合、ノズルがないせいか、立ちションすると放射状にまき散らされた。

当然、ハイレディンは頭から浴びせられる。

「あはは、これがいまのあなたの身分よ。よくく自覚しなさい」

健康的な少女の温かい液体で、全身をずぶ濡れにされたハイレディンの監獄生活は、こうして始まった。

「ええ」

嗜虐的に笑った二人は、先ほどと同じように、ハイレディンから見ても、右手にアルベルタ、左手にリズリットが屈み込み、生乳なまうちを差し出した。狭間にあるのはいきり立ち、先走りの液をだらだらと垂れ流し、プルプルと射精直前の兆候を示す逸物。

（ウソだろ。こんな、二人して、おっぱいを、パイズリをしてくだと……二人ともでけえ。どちらもセレスティナよりでかい）

もちろん、ハイレディンはパイズリ経験もある。

出陣直前の一週間に渡る甘々なセックス漬け生活のときに、侍女たちからいろいろと入れ知恵されたセレスティナがやってきたのだ。

愛しい婚約者の乳房の大きさは、成人女性としては平均的だろう。大きくも小さくもなかった。形は最高に美しかったが。

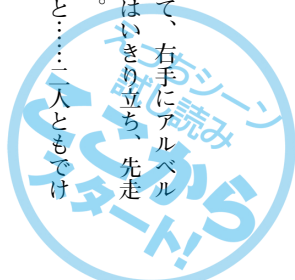
それに比べて、明らかにワンランク上の巨乳と、太刀打ちできない爆乳が近づいてくる。そして、挟まれた。

（あ……）

どちらか一方でも凶悪な大きな乳房だというのに、それがダブルできたのだ。

ムニムニトロトロ

なにもかも包み込んでくれるかのような柔らかさと、油断すると弾き飛ばされるような



弾力。その二種類の乳房に包まれて、ハイレディンの意識は桃源郷に飛んだ。

(も、もう……ダメだ。セレスティナ……すまん)

決して好きなわけではない。しかし、絶世の美女と小生意気な美少女の柔肌の感触に、ハイレディンは敗北した。

百日間、我慢していた男の欲望が、女の柔肌に包まれて歓喜する。

ドビュビュビュ——ッ!!!

勢いよく噴出した白濁液が、アルベルタとリズリットの顔を染める。そうハイレディンはごく当たり前に予測した。

しかし、現実は違う。

「？」

射精したとばかり思っていたのに、肉棒の先端から精液が出ない。ありうべからざる事態に、ハイレディンは困惑し、焦燥に駆られる。

「うふふ、射精したと思ったのに、出なかったのがそんなに不思議？」

パイズリしながら嗜虐的に笑ったのはアルベルタだ。

リズリットのほうは、パイズリに一生懸命でなにが起こったのかまったくわからないようで、キョトンとしている。

「射精というのは、筋肉が躍動することによって精液を噴き出すことなのですよ。その筋

肉を動かさないように固定してしまえば、噴き出すことができないの。そして、射精を司る筋肉は、ここ」

ぐいっ

ハイレディンからは死角となり見えなかったが、アルベルタの指先は、男の肛門と肉袋の間、蟻の門渡りと呼ばれる部分を押ししていた。

「あはっ♪ 殿方の射精したくともできない絶望に満ちた表情。たまりませんわ♪」
歓喜の表情を浮かべながらアルベルタは素早く、逸物の根元を糸のようなもので縛り上げた。

「あはは、いかがかしら？ 射精寸前で逸物を物理的に止められてしまった気分は？ 太い紐ですから、食い込みは少なく、痛くはないでしょ」

「ぐうううう」

怒張した逸物が、ピキピキと悲鳴をあげて反り返る。

「これって大丈夫なの？」

パイズリをいったん中断したりズリットは、心配そうな顔をする。

「ええ、男という生き物は、射精したら一気に冷めてしまいますからね。射精させないのが調教の基本なのです」

「なるほど」

興奮状態のアルベルタとは逆に、リズリットは若干引き気味である。

構わずアルベルタは舌なめずりをしながら、熱く語った。

「ああ、こんなに立派に反り返ったおちんちんが、射精できずにビクンビクンと痙攣して苦しんでいる。このような姿を目の当たりにするだなんて、女として心が痛みますわですが、同時に萌えますわ。子宮がキュンキュンいたします」

興奮に顔を輝かせたアルベルタは卑猥に腰をくねらせる。そのむっちりとした内腿はテラテラと濡れ輝いていた。

「ああ、男のもつともセクシーな表情は、射精している瞬間というのはよく言われますが、この射精したくともできずに苦悩している表情こそ、至宝だとあたしは考えます。これはもはや芸術ですわ。一日中、眺めていたい」

「ええ、なかなか面白いわね」

アルベルタの熱にあてられたのか、リズリットも瞳を爛々と輝かせる。

「さて、この豚男。出したいですか？」

「……」

口の利けないハイレディンは、無様に勃起させた逸物をそのままに頷いた。

「ああ、声が聴きたいですわ」

声を弾ませながら立ち上がったアルベルタは、ギャグボールを外し、ハイレディンの口

内からショーツを引き抜いた。

「さあ、どうして欲しいか言いなさい」

「しや、射精させてくれ」

恥も外聞も失った牡の切羽詰まった声に、アルベルタは自らの股間を押さえて身悶える。「あはは、いい鳴き声です。男の堕ちたときの声は実に心地よい。犬のようにワンと鳴きなさい」

「わん！」

躊躇わずに応じるハイレディンの姿に、リズリットは呆然とし、アルベルタはいつてしまったかのように、体をのけぞらせる。

「ああ、いい。……仕方ありませんわ。あたしも鬼ではありません。射精したくて仕方がないおちんちんをいつまでも、放置するなんてことはできませんわ」

それからアルベルタは、傍らで絶句している雇い主にお伺いを立てる。

「さて、このように堕ちました。いまから枷を外しますが、お嬢様がお楽しみになりますか？」

「え？」

「この豚男のおちんちんで、セックスを楽しまれますか？」

アルベルタの確認に、動揺したリズリットは両手を前に突き出して、広げた掌を左右に

振るう。

「な、ななな、なんであたくしが……」

「そうですね。せっかくの処女なのですし、このような豚男にくれてやるのはもったいないですね。機会を選ばれるのがよろしいでしょう」

部下の言い分に、リズリットはムキになって反論する。

「はあ？ な、ななななに言っていますの。あ、あたくしが処女だなんて、あ、あるはずがないでしょ。あたくしモテますわ。モテまくりですから、当然、男なんてズボズボですわよ。処女を賭けてもいいわ」

全身からだらだらと脂汗を流したリズリットは、矛盾しまくっていることを口走っていると自覚していない。

苦笑しながら、アルベルタは逸物の枷を外した。

「はあ」

逸物に血が通い、一息ついたハイレディンは安堵の溜息をつく。

しかし、一時の射精感覚は止まり、新たな刺激がないと射精できない。

リズリットが相手をしてくれないのはまだしも、いかにもヤリマン女で興奮しまくっていたアルベルタが、そこから動かないことに戸惑う。

男のもの言いたげな視線を受けて、アルベルタは肩を竦める。

「あら、もしかして、あたしとセックスできるなんて思っていましたの。豚男の分際で、クスクスクス」

口元に右手の人差し指の第二関節をあてがったアルベルタは、気持ちよさそうに嘲笑する。

「あたし、豚男とはセックスしないことにしていますの。おあいにくさま。独りで勝手になさればいいでしょ」

どうやらアルベルタは、どこまでも男を辱めるつもりらしい。

悔しいが、いまは射精しないと収まりがつかない。自洗をしようとしたが、両手の鎖は繋がったままだ。

「鎖を解けっ」

必死に叫ぶハイレディンを前に、気取った仕草でアルベルタはクルリと後ろを向く。

「セックスの相手を務める気はありませんけど、まあ、お手伝いぐらいはして差し上げましょうか？」

なにやら器具を持ったアルベルタが戻ってきた。それはまるでコップのような形状をしている。

「……？」

戸惑うハイレディンの見守る前で、アルベルタはその手にした器具を、カポッと逸物に

かぶせた。

「ハイレディン卿のようなモテモテな男性には縁がないでしょうけど、これはオナホといつて、モテない男の御用達なしろものですよ」

いわば男版バイブといったところだろう。

「さあ、思う存分に腰を使つて、ここに射精してください」

「くっ」

悔しいが、背に腹は代えられない。蔑みの眼差しで見下ろしてくる美女が右手に持つて差し出したオナホに向かつて、ハイレディンは恥を忍んで腰を動かす。

「あはは、気持ちいいんですか？ こんなものが……くすくすくす、言っておきますけど、あたしのオマ○コ、こんなまがい物よりも、何倍も何十倍も気持ちいいですよ」

たしかに気持ちよさそうである。性格は最悪でも、スタイルは抜群なのだ。しかし、そんなことよりもとにかく射精したいハイレディンは、黙々と腰を前後させる。

「はあ……、はあ……、はあ……」

「あたしとやりたいのなら、土下座してお願いすることですわね。そうすれば考えて差し上げてよろしいですよ。まあ、考えるだけですけど」

そうやって侮られながらもハイレディンは急速に高まる。もともと射精寸前で止められていたのだ。決壊のときはすぐに訪れた。

「はあ……」

ドクン！ ドクン！ ドクン！

屈辱に満ちた射精とはいえ、無理やり溜めに溜められたあとの解放である。

この世のものとは思えぬ忘我の快感であった。鎖に繋がれたままハイレディンは、精も根も出してしまったかのようにぐったりと脱力する。

射精が終わったところを見澄まして、アルベルタは手にしていたオナホを外す。そして、中を覗き込む。

「あらあらこんなにいっぱい出して。ほんと溜まっていたんですね」

嘲笑いながらアルベルタは、手にしたオナホをハイレディンの頭上に翳した。そして、傾ける。

ドロドロドロ……

頭から白く臭い液体が滴る。

その光景を見たリズリットは、突如、狂笑を張り上げて、手を叩いた。

「あはは、すごい。なんてみっともない姿なのかしら？ 百年の恋も冷めるような痴態ね。セレスティナに見せてあげたいわ」

「どうやらお嬢様にも満足いただいたようで。それでは続きはまた明日ということ。うふふ、もつともつとじつくりとプライドをすり潰して差し上げますわ」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

二次元ドリームノベルズ

夢幻姫騎士
SIN

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させてあげる
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

フリリダム120%!?
ジャンルにこだわれない
ドキドキ×ラブ！

呪詛喰らい師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？



あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍しつこめなエロチチノベル！

二次元ぷち文庫



小説家になろうの男性向けサイト
「アケタイン」ノベルズ
から書籍化！



異世界
で生きる
妹は
ウマい？

ドキドキクラブな
ハーレム系
ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

姫騎士 クラスメイト！
ビギニングノベルズ